



2007年

**SORA** 17号

晴  
夜  
(17) | 2

柴  
田  
佐  
知  
子

木  
犀  
の  
匂  
ひ  
た  
ど  
つ  
て  
ゆ  
け  
ば  
闇

反  
り  
強  
き  
石  
橋  
寒  
波  
来  
た  
り  
け  
り

むづかしき誰かれのゐて飾り炭

春近き水音となりぬ母の歩も

驚いてまた貌をだす鳩

春立つや瓦一枚づつ見えて

人間に犬齒の尖り黄砂来る

眠らざる水は走りて櫟の芽

離島めぐ

服部 早苗

ヨーヨーをつぶてのごとく冬の浜

冬霞さつきとちがふ沖の船

日展の入口にまた出てしまふ

木の葉散る熱きココアを吹くときも

新聞広告どさと勤労感謝の日

オーロラの旅の広告落葉焚



ビートルズ世代の落葉焚きにけり

新宿御苑

落葉して全き無碍の木となれり

まだ内に枯れを尽くせぬ木のありぬ

プラタナス・ベンチ・プラタナス・ベンチ・冬日

立ち泳ぐやうに寒林ぬけにけり

短日の腕つままれて注射受く

ポインセチアなじまず新設の医院

離島めく足の小指の霜焼けて

渡岸寺 十一面観音

春隣うしろ暴悪大笑面

冬  
菊

高倉恵美子

法要の席に新米供へけり

リハビリの芙蓉の道を一步一步

冬空や人骨なんと軽きこと

褒められて配る野菜や十二月

倒れたるままに冬菊咲く路地よ

五本指の足袋をはきたる庭師かな



猪穴を埋むに冬菜入れにけり

出征日なりしと夫や年の暮

山茶花のやたらと咲きて散りにけり

元旦に合はせ白菜漬けておく

初日記大学ノートに書きはじめ

正面の庭石も入れ初写真

日向ぼこ一人であればさみしかり

冬ぬくし息子の作る玉子焼き

麦を踏む足の弱りし老いばかり

青き火

樋口みのぶ

柿吊るす帯の取れしはひご刺して

雪降つてすぐに日のさす忌日かな

雪女さびれし駅舎覗きけり

餅搗くや明けの明星残るころ

我を消しゆく歳晩の家事雑事

粥腹の母を思へり冬三つ星





大字も小字もわたる除夜の鐘

一人づつ替はりて母へ初電話

踝を波の洗へる初稽古

キャンパスに捨て犬飼はれ日脚伸ぶ

赤を着て白髪美はし初恵比寿

蛇穴をでてやはらかき雨の中

花のごと鳥にパン屑撒けば春

青き火をまとひて毛虫焼かれをり

# 空集

柴田佐知子選

新潟松之山

着ぶくれて秘湯へ往復切符かな

東京

田島洋子

雪原に立たされ祓の一升瓶

婿投げの薬師堂よりしづり雪

村あげて墨付正月迎へけり

墨つけて笑ひころぐる小正月

吉利支丹墓すつぼりと雪の底

赤き眼で雪を見てゐる雪うさぎ

川音に重たき雪を捨てにけり

寒風に姿さし出す金閣寺

福岡

星原悦子

弾けたる風船のごと冬の来る



恋しき人いづこと問へば野山枯る  
価値観の違ひですます炬燵かな  
食するに飽く日もありて冬桜  
恋しゆうて恋しゆうて椿赤く落つ  
拒んでは振り向いてゆく冬の風  
旅籠屋の椿の如き一夜かな  
買初は傘寿自祝の紅ひとつ  
しみじみと覗く傘寿の初鏡  
左義長や煙の中の塞の神  
新酒の香甲斐路はすべて山の中  
晩く来る倅せもあり冬至風呂  
残照の冬田を展げ過疎すすむ

行橋

安武  
晨しん  
子こ